

『海賊王は虜を愛す』

著:六堂葉月

ill:前田紅葉

大和の社交界で華々しい生活をしていた美邦が内情のすべてを知ったのは、二カ月前に執事の爺やが倒れ、亡くなったときだった。

爺やは当主の美邦に、懐事情を頑なに隠していたのだ。

貴族は体面を重んじる。晩餐会や舞踏会などの主催はもちろん、日頃の生活も思うがまま、金勘定などせず生きてこそ貴族だった。

資産がとくに底をついているなどと、主である美邦に一切知らせなかったのは、彼なりの忠義だったのだろう。

美邦が両親を亡くし、当主を引き継いだ十歳の頃には、室菱家は貴族として、もはや完全に沈みゆく船だったのだ。

爺やは陰で一人、必死に金策を重ね、その無理がたたり過労で倒れ、そのまま療養のかいなく亡くなった。

美邦にできる限りの贅沢な暮らしをさせてやろうと、その思いだけに生きた人だった。

命が消えるその瞬間まで、美邦の今後を案じ続けて。

来年、子爵家としての登録費を納められなければ、破産し没落したという屈辱的な醜聞が社交界に語り継がれる。

なんとしても絶対にそれだけは避けたい美邦が思いついた策が、異国の大貴族の愛人になることだった。

異国の貴族に見初められて海を渡ったというシナリオは、夢物語のようで大和社交界では羨望の的となるだろう。

愛人となれば、室菱家の登録費も当然払ってもらえる。貴族としての称号の維持は、両者に共通するメリットだ。

しかし、その代償は大きい。

この身体を捧げることになるのに、まったく抵抗がないと言えは嘘になる。

大和社交界の華として注目を集めていた美邦だが、正式な恋人を持ったことは一度もなかった。

さまざまな誘いに好奇心が擱られないわけではなかったが、深い関係は愛し愛されてこそという思いが強かった。

まるで少女のようだと笑われるかもしれないが、美邦はそんな清らかな自分を誇り、貴族ならば大抵は持つ許嫁すらも、あえて作りはしなかったのだ。

いつか絶対に運命の出逢いがあるはずだと、財産が尽きているとも知らずに、花園のような社交界で蝶のように夢の日々を生きてきた。

しかし現実を突きつけられれば、もうそんな悠長なことは言っていられない。

愛人契約を交わし、子爵としての身分を保証する登録費を払ってもらい、自分はどんなことをしても優雅な生活を続けなければならない。

それは何も、生まれ持ったプライドの高さだけが理由ではない。

爺やが最期まで懸命に守ろうとした、美邦の貴族としての生活。

美邦は、爺やの墓前で誓いを立てたのだ。

自分は、決して子爵の地位を失わないと。

どんな手段を用いても、誰よりも優雅に美しく、貴族として相応しい生涯を送ることを決意し、大和を後にしたのである。

だから今夜のオークションも、そして受け入れることになる愛情のない関係も、今さら戸惑うことなど何一つない。ないはずだった。

「……っ」

それなのに、テラスの手すりの上に置かれた美邦の白い指先は、震えがとまらない。一刻一刻と迫る時間に怖じけづき、助けを求めるとして震えている。

いっその目の前の海に消え失せてしまいたいような、そんな思いすら込み上げてきた、ちょうどそのとき。

「まるで、今にも海に飛び込みそうな顔をしているな」

突然、一人の男が美邦のいる特別室のテラスにふわりと舞い降りた。

そう、美邦にはまさに天から舞い降りたように見えたのだ。

スラリとした高い身長。肩に届く漆黒の髪と、妖しい黒いマントが海風に揺れる。

薄暗くなったテラスにいても、彫りの深い顔立ちはよくわかり、思わずドキリとするような甘いマスクだ。

「……だ、誰だっ、お前はっ？」

この船の者ではない。いや、人間かどうかも定かではなかった。

何しろここは最上階にある船室のテラスだ。来られるとしたら、屋根、もしくはマストの上から以外にない。

海軍並みの武器を携えた船が辺りを警戒しているし、この船内にも警備兵が常に巡回している。その目をかいくぐりこの場に現れるなんて、明らかにおかしい。

(まさか…本当に魔物が…?)

迷信めいたことはあまり信じたくないが、この海域では絶世の美女や前文明の魔物が出るという噂だ。

現れたのは美女ではないが、同性でもうっとりしたくなるような色男。

美邦も自分の容姿には大層自信があるが、中性的な自分とはまったく違い、男としての魅力では完全に負けていた。

そして、登場からしてただ者ならぬその雰囲気は、警えるならまさに魔性。

人を遥かに超えたような、計り知れない何かを持っていることがひしひしと感じられる。

こんな男には、かつて一度も逢ったことがない。

不審と警戒で身を硬くし、キッと見つく顔を顰めた美邦に、男が目を細める。

漆黒の瞳は、まるで獲物を見定めるかのようだ。

だがすぐにそれは一転し、男はハンサムなその顔で穏やかにこちらに微笑んだ。

「美しい『極東の真珠』が、そんな怖い顔をしないほうがいい」

「…どうして…それを？」

『極東の真珠』は、今夜のオークションの目玉。それが美邦であることはトップシークレットだ。主催者以外はまだ誰も絶対に知らないことだった。

美邦が驚きに細い肩を戦慄かせると、男はサラリを言い放つ。

「この海で、俺が知らないことはない」

なんと大胆不敵な発言。しかし、それがとてもさまになっていて、男の妖しい魅力にグイグイと心が惹きつけられる。

「…っ」

得体の知れない相手を目の前にして怖いはずなのに、美邦は自分の心が高鳴るのを感じた。

まるでこんな出逢いをずっと待っていたかのように、ドキドキと脈打つ鼓動が端からでもわかってしまいそうだ。動けないし、目も逸らせない。

魔物に魅入られてしまうというのは、こういうことを言うのだろうか。

海風に髪とマントをなびかせて、男が言う。

「お貴族様が、自らをオークションで売り出すとはたいした度胸だ。だが、もしそれを後悔しているなら…」

「私は、後悔などしていないっ！」

その途端、美邦は全身で怒りを露わにし、男の言葉を強い口調で遮った。

後悔など、そんなことをするわけがない。

自分はなんとしてもこのまま貴族として生き続けなくてはならないのだ。そのためになすべきことを行う決心はとうの昔についている。

なのになぜ、今さらそれをこんなわけのわからない男に指摘されなくてはならないのか。

突然現れて、必死に隠している心の奥を勝手に覗かれたような気がした。

「無礼もいいかげんにしろっ。人を呼ぶぞっ」

美邦が警備兵を呼ぼうとすると、男は逃げるところか美邦に歩み寄ってくる。

「なら、その前に口を塞いでしまおう」

そしてグイッと力強く広い胸に引き寄せられ、大きな男らしい手に顎を捕らえられると、そのまま口づけられた。

しっとり柔らかいその感触。キスは初めてではないが、こんな強引に奪われたのは初めての経験だ。

驚きに目を見開き、思わず開いた唇の隙間からなんの躊躇もなく舌が滑り込んでくる。明らかに、こうした情事に慣れた様子だった。

「…んっ…ふ」

他人の舌が口内を這い、クチュリと水音を立てて自分の舌に絡みつくと、背筋にかつて感じたことのないゾクゾクとした痺れが走る。

歯を立てようと思えばすぐにできるはずなのに、どうしてか身じろぎ一つできないまま、美邦はねっとり巧みなキスを甘受してしまう。

これは何かの魔術か。

いつしか美邦の身体はすっかり力が入らなくなり、うっとりするかのようにそのまま身を預けてしまった。

本文 p18～26 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>